

レバノンでの  
シリア難民・  
パレスチナ難民支援

# 夏のお掃除 キャンペーン



総勢100名近くの  
子どもが参加

描き上げた作品を前に、改めて自分を取り巻く環境を見つめ直してみると、子どもたちから怒りの声が挙がりました。「どうしてこんなことになっているのだろう？

120万人のシリア難民が流入している隣国レバノンには、70年前から住むパレスチナ難民も30万人います。その結果、人口の3人に1人が難民となったレバノンでは、多くの社会問題が発生しています。特に私たちが長年活動してきたパレスチナ難民キャンプでは、ただでさえ厳しかった生活が、もっと厳しくなり、元からの住民も新しい難民もお互い辛い思いを抱えています。

当会では2013年から新たにシリア難民支援も開始し、厳しい中で生きる子どもや家族を支えています。でも子どもも大人も、ただ支援を待っているだけでなく、自らの環境を変えようとできることを始めているのです。

## 僕たちにもできることがある

きっかけは、レバノンの首都にあるブルジパラジネ難民キャンプで行った夏の描画ワークショップでした。「自分を取り巻く周りの環境を描こう」をテーマに、長いロール紙を使って自由に描いてもらいました。バヤンちゃんは、キャンプに蜘蛛の巣のように張り巡らされた電線と水道管の様子を描きました。「去年、親戚が傘を差してキャンプの中を歩いていたんだけど、傘の先が電線に触れて即死してしまったの。5年前にシリアからこのキャンプに逃げてきたけど、こんなところだとわかっていたら、ここには来なかったと思う」。ヤヒヤ君は、ゴミを投げ散らかす人々の様子を描いて、その横に「どくろマーク」をかきました。「キャンプには危険なところが多すぎるよ。ゴミの悪臭でアレルギーになる人もいるし、通りも汚くなって、ぼくたちを取り巻く環境は本当に良くない。」

なぜ、大人たちは何もしないのだろう？ こんな状態のままで、ぼくたちはずっと我慢しないとイケないの？」

ワークショップが終わって片づけをしている最中に、モハンマド君が「ねえ、ゴミ集め、してみない？ ぼくらの周りはこんな環境だけど、ぼくらにもできることがあるかもしれない。」と言い出しました。他の子どもたちも次々と賛同し、「みんなでゴミ拾いしようよ」ということになりました。

8月のある朝、シリア難民の子どもたちが次々と、「子どもの家」センターに集まってきました。まずは白いTシャツにスプレーで好きな模様をグループごとに描きます。お揃いのTシャツを着るのは、キャンプの住民に、ゴミ集めのキャンペーンだと一目でわかってもらうため、また子どもたちの士気を上げるためです。残念ながら、「掃除」や「ゴミ集め」は卑しい仕事だと考える大人が大勢いるのです。

ゴミを拾う際の注意事項を説明した後、皆で白いTシャツを着てゴム手袋をはめ、総勢90人近くの子どもたちがゴミ袋を片手にセンターを出発しました。大通りに散らばるゴミを、素早く、熱心に子どもたちが集めていきます。あちらにも、こちらにも、あらゆるゴミが散乱し、またたく間にゴミ袋は満杯になっていきます。照り付ける太陽の下、ゴミ集めに励む子どもたちを見て、キャンプに住む大人たちが「ご苦労さん」「ありがとう」と声をかけてきました。その瞬間、子どもたちの顔がさっと笑顔になりました。

た。「シリアから難民が来て、物価が上がった。キャンプ内が狭くなった。」など、非難の言葉を浴びせられることの多かった子どもたちに対して、今、キャンプの住民からあたたかい言葉が差し出されているのです。

ゴミ集めをすること一時間ほどで、抱えきれないほどのゴミが集まりました。センターまでゴミを持って帰り、広場に積んでいきます。積みきれないほどの大量のゴミが集まりました。回収したゴミは、UNRWAに報告し回収してもらいました。

## 子どもたちは、なぜはしごゲームが好きなのか

センターに戻った子どもたちの顔はみな誇らし気な笑顔で輝いています。ひと休みした後は、子どもたちが大好きな「はしごゲーム」の時間です。「はしごゲーム」は2列に並んで座った子どもたちが、互いに足裏を付けてはしごを作り、子どもたちがはしごを順々に飛んで、その速さを競っていくゲームです。「はしごゲーム」が始まると、会場は一斉に歓声に包まれます。病気がちな子どもも、家庭内に多くの問題をかかえている子どもも、皆、一心に声援を送って飛び跳ねています。

他にも色々楽しいゲームはあるのですが、子どもたちのお気に入りはいつも「はしごゲーム」。「なぜ、子どもたちはこのゲームが一番好きなのだろう？」子どもたちの満面の笑顔を眺めながら、ふと思いました。一組のはしごを飛び越すと、また次のはしごが待っています。長い長いはしごは、特に幼い子どもたちにとっては、なかなか大変なはず。子どもたちを見ているうちに、「一つ、一つ、はしごを乗り越えていくという感覚が、子どもたちは好きなのではないか」と思いました。シリアから避難後、環境の変化、父親の失業、学校でのいじめ、家族の病気、食糧難など、数え切れないほどの困難に直面してきた子どもたち。必死になって、目の前に迫ってくる困難を乗り越えざるを得ない。一瞬たりとも、休む間は与えられないのです。でも、このゲームでは、「はしご」を乗り越える過程で、周

りのお友だちが心からの声援を送ってくれる。子どもたちは、お互いにとても励まされた気持ちになるのではないのでしょうか。

## これからも、続けたい

ワークショップの終わりには、いつも振り返りの時間を作っています。子どもたちから、「キャンプ内の人に、ねぎらいの言葉を貰ったのが嬉しかった」「自分のしていることを誇りに思えた」「これから、自分の家の周りでもゴミ拾いをしようと思う」など、様々な意見が挙がりました。モハンマド君が手を挙げて、「今日のゴミ拾いは素晴らしかったけれど、一回だけじゃ、意味があまりないと思う。これからも、みんなで定期的にゴミ集めをしようよ」と言うと、子どもたちが次々と賛成して、大きな拍手が沸き起こりました。

山積するゴミ問題を作り出したのは、決して子どもたちではありません。ずっと以前からゴミ問題があり、子どもたちはその犠牲者なのです。それでも、子どもたちはその環境から逃げ出すことは許されず、直面していくしかありません。そんな中で、子どもたちが自発的に、少しでも環境を改善していこうという意思を抱いてくれたことに胸を打たれました。



みんな大好き  
はしごゲーム

